

第3章 実態経済に大きな影響を及ぼす金融面の動向

1. 金融システムの立て直しはどこまで進んだか

膨大な不良債権処理コスト

不良債権・・・()

バブル経済が残した最大の負の遺産である。

銀行 破綻した金融機関を保護する為に約 20 兆円の公的資金を投入。金融機関の資本強化の為に投入された公的資金も約 12 兆円。

減り始めた不良債権

1992 年度以降、不良債権処理に取り組むが減り始めたのは 2002 年度以降。

Q. バブル崩壊後、なぜ不良債権が増え始めたのか？

A. 不良債権を一旦処理しても、その後の()下落で担保価格が低下し、それにつれて不良債権が増えたという事情に加え、()の不良債権も毎期大量に発生したため。

「リスク管理債権」・・・不良債権の情報を一般に開示する為に使われる国際基準
破綻先債権 延滞債権 3 か月以上延滞債権 貸出条件緩和債権

都銀・長銀・信託 「金融再生プログラム」により 2005 年 3 月末までに不良債権比率を 4 % まで引き下げる目標が掲げられ、2004 年 9 月末で 4.6%まで低下し、目標達成は可能？！

地域金融機関 不良債権比率の数値目標は掲げられていない。2002 年 3 月末に 7.9%ともっとも高まったが、2004 年 3 月末には 6.9%、9 月末には 6.4%と低下傾向にある。

不良債権比率高止まりが長期化した理由

- 1980 年代後半におけるバブル期における不動産価格の高騰が著しく、その反動で、地価調整も大幅になった。
- 金融機関サイドにも、金融当局や政府サイドにも、バブル崩壊で表面化した不良債権問題の本質やその潜在的大きさに対する認識の甘さがあり、不良債権処理への本格的取り組みが遅れたこと。
- 不良債権の全体像を把握する為の体制整備に時間がかかったこと。

不良債権処理は大きな峠を越えたのか

《不良債権問題を 10 年以上という非常に長い時間をかけて処理する方式をとった日本》

1997 年秋・・・人々が不良債権の深刻さに気が付く

1997 年 11 月・・・たくぎん、山一証券が倒産

1998年・・・2つの長期信用銀行が経営破綻

1999年3月・・・公的資金注入により、一時、不良債権問題は峠を越えたとの期待も

2001年・・・景気後退で不良債権が一段と増え、金融システム不安は解消されず

不良債権問題の深刻化に伴う株価の下落

2005年4月・・・ペイオフ解禁！！

2．量的緩和政策の効果をどうみるか

デフレと戦う姿勢を鮮明にした日銀

1999年2月・・・日銀は「()政策」を導入

2000年8月・・・日銀は政府の反対を押し切り「()政策」を解除

2001年・・・米国の景気後退の影響を受けて日本の景気も後退局面に入る

ゼロ金利政策の解除は政策ミス？！

2001年3月19日・・・「()政策」を導入

「翌日物無担保コールレート」から「日銀当座預金」

量的緩和政策 消費者物価（除く生鮮食品）の前年比上昇率が安定的にゼロ以上になるまで量的緩和を継続する。

量的緩和政策はどのような効果をもったとみることができるか

- 日銀の量的緩和政策は、金融機関の流動性を高めることにより金融機関の流動性不安を解消したこと。
- 量的緩和政策は長期金利の安定化効果をもった。
- 実体経済に対しても何がしかプラスの効果をもった。

金融政策変更は視野に入ってきているのか

消費者物価の上昇率が安定的にゼロ%以上になるのは、まだ時間がかかる。

日銀が量的緩和政策を解除し、短期市場金利を操作目標とする通常の金融調査方式に復帰できるのは、早くても2005年度の後半以降となるだろう。

3．日本の金融業の課題

不良債権問題のあとに残る問題

- 収益率の向上（新しいリスク管理の手法）
- 経常収入に占める手数料収入等の非金利収入のウェートが低い。

金融コングロマリットが進む日本の金融業

金融コングロマリット（複合企業体）・・・巨大銀行グループの形成。

Q．なぜ金融コングロマリット化が進行しているのか？

A．激化するグローバル競争に勝ち残る為には、規模の拡大と金融サービスの多様化を図り、経営余力とノウハウを十分に蓄え、将来のグローバル競争激化への布石を打っておかなければならないから。

みえてきた日本の金融システムの方向性

- 資産運用を投資信託などの専門の仲介期間に委ねるといった動きがある。
- 貸出市場においてシンジケート・ローン（複数の金融機関が集まって1つの企業に融資する）プロジェクト・ファイナンスなどの新しい融資形態が伸びてきていること。